

篠田淳司さんの霊山への思いをつなぐ会

勇ましい高尚な生涯
—篠田兄が遺されたもの—

2016年5月20日

野池達也

篠田淳司兄のご経歴

篠田美佐子奥様より

篠田兄は、1947年(昭和22年)4月19日に、三重県の久居市で、お生まれになりました。幼少の頃、岡山県倉敷市に移られ、お父様の仕事の関係で、その後、小学3年生の時に上京されました。

中学時代はバレーボール、都立高校・大学(当時は東京水産大学, 現在は東京海洋大学)時代は野球部に所属し、いずれもキャプテンだったそうです。ずっと海洋学の研究を続けたかったらしいのですが、奥様によりますと、「頭が追いつかず」とのことです。その道を断念されて、海運・造船業界専門誌の会社に入られ、以来、生涯、編集の仕事に携わられました。

美佐子奥様も新卒で同社に入社され、篠田兄と知り合われました。兄が30歳、奥様が24歳の時にご結婚なさり、38年間の歩みをともにされました。その後、それぞれ別の会社に転職されましたが、ジャンルこそ異なりましても、ほぼ共働きで、ともに編集の仕事をライフワークとされました。篠田兄は公共投資ジャーナル社に奉職され、当時「環境施設」編集長をされておられた宮本恒男様と知り合われ、「環境施設」の編集を引き継がれました。

以来、取材を通じて、篠田兄は多くの方々との出会いと新たな経験に恵まれました。2006年には、特定非営利活動法人再生可能エネルギー推進協会(REPA)の設立に参画され、自ら事務局長の労を取られました。皆様もご存じのように、ことに原発被災地霊山の復興のために、献身的に貢献されてこられました。

篠田兄と私

初めての出会い： 2011年9月3日、第2回かまくら市民学習会のメタン発酵に関する講演会で、前列で聴いておられた篠田兄の真摯な御姿と謙虚なご質問を、今も忘れることはできないのでございます。

これを機会に、日本大学の職場にたびたび来訪されるようになりまして、震災・原発被災地の復興に貢献するメタン発酵についてのインタビューをお受けしました。その内容を「環境施設」に紹介して下さいました。また、国の憂うべき現状につきまして、いつも肝胆相照らす思いをともにし、お互いに励まし合う心の友とならせていただきました。

さらに、REPAによる霊山プロジェクトの活動を教えて下さり、2012年3月31日、霊山にお連れいただき、大沼豊様ご夫妻、佐藤茂夫先生が開始されたメタン発酵実験に参画させていただきました。

篠田兄には、日大での勉強会で、霊山プロジェクトの意義・成果について、熱誠こもれます講演をしていただいたこともあります。

第47回バイオマス・地球環境保全勉強会

2013年3月26日 日本大学大学院総合科学研究科3階大教室

メタン発酵槽の放射性物質濃縮機能に注目した 霊山プロジェクト

NPO法人 再生可能エネルギー推進協会(REPA)

理事・事務局長

季刊雑誌『環境施設』

編集長

篠田淳司

NPO法人 再生可能エネルギー推進協会の主な活動

目的	化石燃料に代わり地球環境保護に寄与する再生可能エネルギーを日本において普及し、再生可能エネルギー技術を通じ、国際交流を図り、環境の保全や技術の必要性を社会に伝え、環境を守る豊かな社会の実現に寄与する
設立	2006年5月31日(東京都認可取得)
代表理事	佐藤茂夫(日本工業大学ものづくり環境学科教授)
主たる事務所	東京都千代田区二番町1番地2 番町ハイム239号室

視察等



葛巻町・森と風のがっこう



木質バイオマス発電
(神奈川県川崎市)

ポイントCO2地域ネットワーク事業

普及活動(展示会・セミナー等)



埼玉県宮代市教育委員会

他団体との交流



埼玉県宮代町アーティストと竹の切り出し



岩手大学・盛岡市NPOとの情報交換会



放射b脳と生活を考える会



霊山プロジェクト

篠田兄の最も愛された霊山の美しい光景

2011年8月撮影



2012年3月31日



2013年2月



2013年5月 霜里農場



と
と
演を聞かぬ
と「悩み」は？
の未来は？

④再生に向けや、てみたい事



2013年6月



2013年6月29日 小国ふれあいセンター

地域再生に向けた課題と方向性の検討

～伊達市小国地区を中心に～

NPO法人 再生可能エネルギー推進協会
篠田淳司

行政

専門家
研究者

事業主体の形成
行政に任せるのではなく、自分たちで考
え、決めていく

NPO等

地域再生計画

どれくらいの時間軸(速度)で進めるのか
急激な変化か、ゆっくりと変えていくのか

(雇用、活性化、若い世代)

【経済構造の転換に向けたヒント】

- ・農産品の販売ルートの開拓
- ・都市消費者と直接契約(支援者との協働)
- ・地域資源の活用によるエネルギー回収・利用
- ・「道の駅」の活用
- ・「地域通貨」の検討
- ・雇用の確保(ソーシャル・ビジネス、コミュニティ・ビジネス等)
- ・外部要因に依存しない地域経済

【生活環境基盤の再整備:しなければならぬこと】

- ・きめ細かな汚染マップの作成(全市を対象に)
- ・農産品の生産過程の開示(除染から全量検査まで)
- ・刈草、稲わら・汚染果樹のメタン発酵処理
- ・セシウム濃縮管理
- ・仮置き場・中間貯蔵問題
- ・学校・観光・医療機関



2013年9月



2013年10月

農業の再生

- 安心して食べられる作物の生産
- 休耕地に花卉作物を育て観光地に
- 有機栽培で安心、安全な農作物→まずは山下行政区で
- 区画整理し大型機械で管理
- 村加価値の高い作物に地域全体で取り組む
- 土質・環境に適合した作物の選択
- 畑の上作り

課題 → **小国ブランド農産物生産事業**

再生可能エネルギーへの期待

- 休耕地等にメガソーラー発電施設→再生エネルギーに
- 糞とバイオガスの利用
- 木屑などを活用したバイオマス発電
- 再生エネルギーを目標とする

課題 → **エネルギー燃料・肥料製造事業**





2014年1月



福島県霊山の寺子屋教室で学ぶ

メタン発酵の原理と応用

簡易型メタン発酵施設の建設・維持管理にむけて

監修/野池達也・東北大学名誉教授
/佐藤茂夫・日本工業大学名誉教授（REPA代表理事）

発行 NPO法人再生可能エネルギー推進協会
寺子屋教本編集委員会

メタン発酵寺子屋教室

篠田兄の作成された寺子屋教室教本CDは、被災地復興の基盤となる後世に遺る作品であります。ここには、霊山をはじめ被災地の皆様のお傷みと悲しみに対して、何とかしてお役に立ちたいとの兄の愛と真実の御心がひしと感じられます。あれほどの打撃を受けられた霊山の方々が、大豆栽培を始めとする農業の再開にまで立ち上がるに至りましたのは、ひとえに、篠田兄の至誠のお働きのゆえに、ほかありません。



2014年6月 宮城県松島にて





奥の細道
五大堂
←

White bucket hat

Glasses

Blue and white plaid short-sleeved shirt

Blue jeans with black belt

Plaid short-sleeved shirt

Leopard print crossbody bag

Black clutch bag

Dark brown long-sleeved jacket

Black floral tote bag

Person in white cap and white shirt

Person in purple shirt and black shorts with backpack

Wooden steps

Stone wall

Water

3



篠田兄を悼みて

篠田兄は、原発被災地の傷み苦しみの中に在られる方々のために心碎かれ、
霊山プロジェクトの先頭に立たれました。病後の御身体にも関わりませず、いつも
ご自分のことは顧みられず、福島駅9時20分の集合のために、朝早く鎌倉のご自
宅を出発され、夜遅く帰宅されました。

篠田兄は、正義感と使命感に溢れる友でありました。被災地の皆様のこと、苦
難の中に在られる人々のために心碎かれ、そして国の将来に対する正義の思い
を心から分かち合いました。私はいつも兄から勇気と励ましを与えていただきました。
篠田兄は、聖書にあります「人がその友のために自分の命を捨てること、これ
よりも大きな愛はない」の犠牲的精神の持ち主でありました。

これからこそ、篠田兄の御働きが、わが国そしてREPAにおきまして、必要とされ
ます時に、私達はかけがえのない同志を失いました。真に どんなに惜しみても
惜しみ尽くすことはできません。

篠田兄は、この地上で、神様がお与え給いました最後の一息まで、常に善きことを求めて、前進してやまれない友でありました。

召される4日前、お見舞いにおうかがいいたしました私ども夫婦に、原発被災地の霊山の方々への熱い思いを述べられました。関東では、被災地の方々のお苦しみを忘れかけている人々が多いので、私に講演の機会あるごとに、是非、被災地の現状や霊山プロジェクトの成果について、話して欲しいと言われました。

その時、篠田兄は、ご入院の1か月前、東京での「ベートーベン荘嚴ミサ曲作品123番」の演奏会に出席された時の感動を、私共に語ってくださいました。荘嚴ミサ曲の愛唱の旋律を、お苦しい中から真剣に歌ってくださいました。「俗っぽい旋律がこのようにしばらく続いたあと、急に、天の高きにあるメロデーに変わるのですよ」と、指揮者のように手を振られて、その箇所をララ・・・と声を上げて歌ってくださいました。篠田兄はその夜、奥様に、「神様を感じた」、と述べられたとのことでございます。

篠田兄は、造り主であられます父なる神様の御許に、人生の勝利者として凱旋されましたことを信じる者でございます。兄の真実な御姿は、私達の間には見えなくなりましたが、今は父なる神様の永遠の御国に生きておられます。この地上にありて活躍されておられた時より、もっと自由に、もっと広い範囲で、愛と正義のためのお働きを続けておられることと思います。地上に残る私達に、あの心こもれます励ましの言葉をお送り続けてくださいます。そして、今も篠田兄を愛しお慕いする私達とともに歩んでいてくださいますに違いありません。

篠田兄の遺されたもの

篠田兄は、長年にわたり、「環境施設」編集長として、環境問題解決の核心に迫る記事を世に発信してこられました。また、自らも、正義感こもれます雄渾な論文を執筆され、若き日から一筋に、社会正義への真実な願いを果たされました。

REPAの発足以来約10年間にわたり、事務局長の労をとられ、霊山プロジェクトを始め、人々の福祉と安寧のために、自らの健康を顧みられることなく、誠心誠意貢献されました。

最後に、篠田兄が、この地上における67年の生涯を通じて、私達そして後世のために遺して逝かれた最大の贈物そして本当の遺物は、何でありますかについて考えたいと思います。

「後世への最大遺物」

内村鑑三、1894年7月、山中湖畔での講演
の一文を掲げさせていただきます

われわれが五十年の生命を托したこの美しい地球、この美しい国、このわれわれを育ててくれた山や河、われわれはこれに何も遺さずに死んでしまいたくない。何かこの世に記念物を遺して逝きたい。それならばわれわれは何をこの世に遺して逝こうか、金か、事業か、思想か、これいづれも遺すに価値あるものである。しかし、これは何人にも遺すことのできるものではない。また、これは本当の最大の遺物ではない。

それならば何人にも遺すことのできる本当の最大遺物は何であるか。

それは勇ましい高尚な生涯である。

篠田淳司兄の後世への最大遺物は

勇ましい高尚な生涯

であると思います